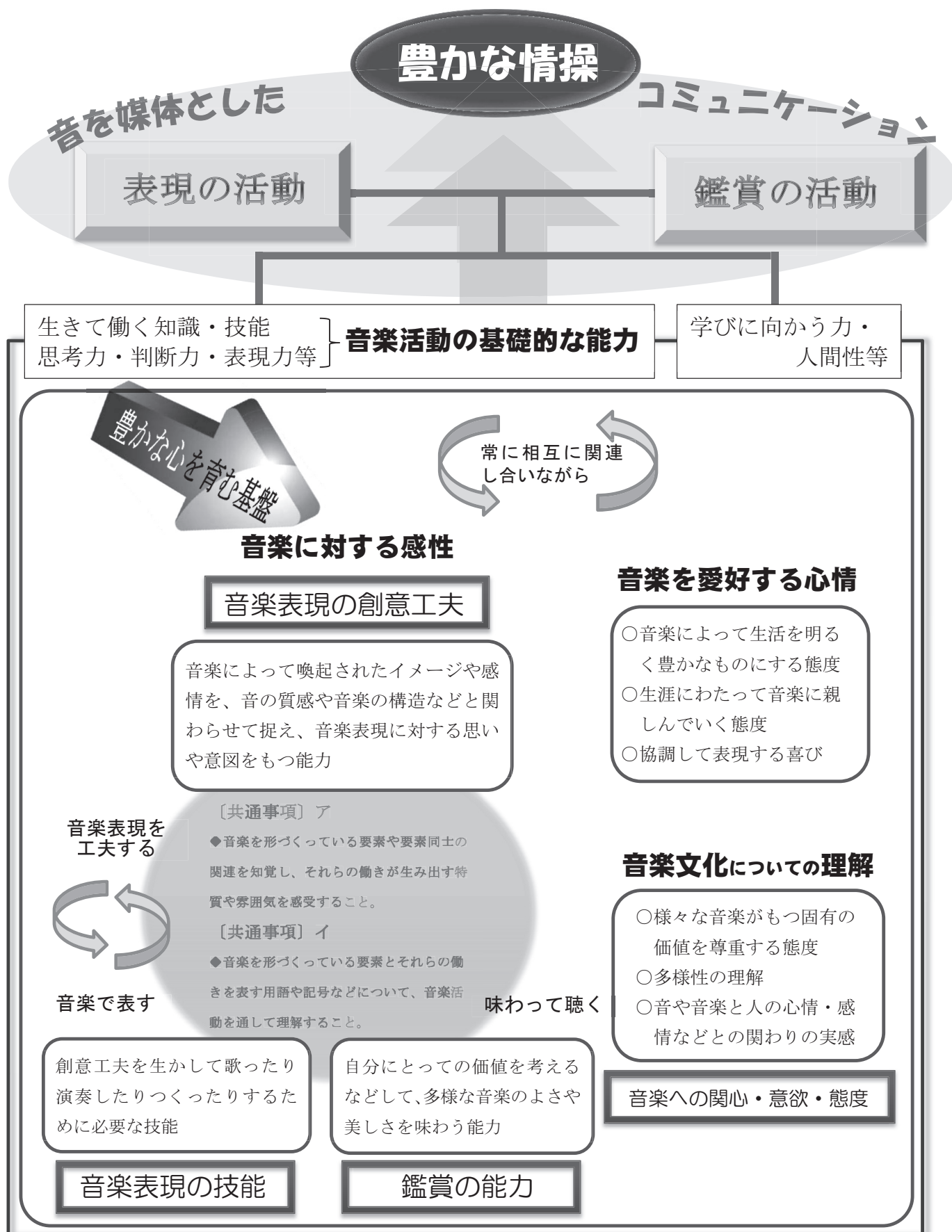


# 音 楽 科

## 音楽科の本質



**音楽科の本質**

中学校学習指導要領の音楽科の目標に「感性を豊かにし、(中略)豊かな情操を養う」とあるように、音楽科は情操教育に大きく関わっている教科である。

**情操：**美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心。情緒などに比べて更に複雑な感情。

豊かな人間性を育むためには、理性的な判断力や合理的な精神だけではなく、美しいものに感動するといった柔らかな感性が必要である。歌唱、器楽、創作の表現活動や鑑賞活動を通して、「生きる力」の中でもとりわけ「豊かな心」を育成していくことに、音楽教育の意味と目的があるといえる。

「豊かな心」を育む基盤となってくるのが「音楽に対する感性」である。「音楽に対する感性」とは、音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取るときの心の働きを意味している。音や音楽を知覚し感受するときに、生徒の音楽に対する感性が働くことから、音楽表現を工夫する、音楽で表す、味わって聴く、すべての音楽活動の支えとして〔共通事項〕が位置付けられている。表現活動では音楽で表すことと音楽表現を工夫することを往還しながら、感性を豊かにしていくことになる。

**音楽科で付けるべき力**

育成すべき資質・能力の三つの柱のうち、音楽科では「生きて働く知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」をまとめて音楽活動の基礎的な能力としている。左図では音楽活動の基礎的な能力、「学びに向かう力・人間性等」と付けたい力の関係性について縦列で対応させて図示した。

これらの力を「21世紀型能力」(国立教育政策研究所2016)に当てはめて考えてみると、創意工夫を生かして音楽表現するために必要な技能、すなわち「音楽表現の技能」が「基礎力」に当たる。左図では明記していないが、「歌詞の内容、楽曲の成立背景、作詞者や作曲者、我が国や郷土の音楽文化、生活の中の音や音楽の働き等に関する知識と曲想との関わりの理解」、「発声、器楽の発音の仕方や奏法に関する知識」、「音楽的な特徴や楽曲の構造と曲想との関わりの理解」等も基礎的な知識として背景には存在している。それらの知識・技能を使い、さらに深く考えていく「思考力」の部分は、「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」の部分で示した力である。

「実践力」の中には、自律的活動や関係形成が含まれている。これらを音楽科で付けたい力で考えてみると、音楽を愛好する心情の中に含まれる資質はまさに自律的活動につながるといえよう。また、音を媒体として他者(友人だけではなく、作曲者や演奏者も該当する)とコミュニケーションを図っていくことが音楽活動であることを考えると、関心・意欲・態度をはじめとした情意に関する資質が、音楽科における「実践力」であるといえる。

**音楽科の本質に迫る授業づくり**

前述の通り、感性を豊かにしたり情操を養ったりしていくためには、音や音楽によって生徒の心が動く瞬間を授業の中でどう仕組んでいくかが重要となってくる。歌を歌うこと、楽器を演奏すること、音楽をつくることによって心が動き、また音楽を聴くことによって心が動く、つまりは「感動」に近い感情が生まれるような授業を目指していきたい。表現の活動では、だんだんできるようになる実感を伴わせたり、自分の思いや意図がだんだん音楽表現となっていく実感を伴わせたりすることが、感動体験につながっていき、鑑賞の活動では、鑑賞曲を聴いてよさや美しさを感じながら、自分なりの価値の創造をしていったり、他者と事実の共有や感受の共感することで価値を認め合ったりすることが、感動体験につながっていくのではないかと考える。

生徒の心が動かなくても、音楽の活動は成立する。例えば、「ひたすらパート練習に取り組んでいる」「示された条件にしたがって、音符を並べている」「じっと黙って音楽を聴いている」などがそれである。もちろん授業のある一場面において、このような生徒の姿が見られることはあるし、そのような活動が必要な場合もある。しかしそれでは本質に迫った授業とは言い難い。生徒自身が本時や題材の学習を終えた時に、“何を学んだか”“学んだことを今後はどう生かすことができるか”が実感できるような授業を目指し、実態に即した題材設定や学習課題の工夫、発問の工夫等に焦点を当てながら、授業研究を進めていきたい。

## I はじめに

本校音楽科では、平成23年度から、音楽的な感受を支えとし、思考力・判断力・表現力を育むために言語活動を充実させた学習指導の在り方について研究を進めてきた。研究を進めていく中で、言語活動は手段であり、それ自体が目的になってはいけないということに改めて気付くことができ、「生徒が何を学ぶか」「どのように学ぶか」そして「生徒が何ができるようになるか」というような生徒のゴールの姿を見据えて、「その題材が適切であるか」などを判断しながら授業を構築していくことが大切であることが見えてきた。他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり、その音楽が自分にとってどのような価値があるかを考えたり、多様な音楽のよさなどを考えたりするために言語活動を取り入れ、言葉で表した思いや意図を音楽で表していく学習過程が、豊かな情操を養うことにつながっていく。つまり、音楽科の本質とは「音楽によって喚起されたイメージや感情を、音の質感や音楽の構造などと関わらせて捉え、思考・判断して表現および鑑賞することを通して、感性を豊かにし、豊かな情操を養うこと」であると考え、研究仮説を以下のように設定した。

### －研究仮説－

思いや意図をもって音楽を表現したり、音楽のよさや美しさなどを味わって聴いたりする過程において、〔共通事項〕と関連付けた問いかけを行っていくことで、音楽に対する感性を育て、音や音楽と豊かに関わろうとする態度を育てることができる。

新学習指導要領における音楽科の目標は、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して学習が行われることを前提とし、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指すことである。生徒が出会った新たな音楽を表現していく中で、その音楽の特徴や楽曲の構造と曲想との関わりを理解し、その音楽を表現するために必要な技能をどう使いながら表現していくかを考えていくことが、音楽表現において創意工夫をしていくことであり、その時に生徒は音楽的な見方・考え方を働かせることとなる。この仮説を踏まえ行った実践を報告する。

## II 実践事例

### 第2学年 【A 表現・歌唱】ア、ウの実践

#### 1 題材名

情感を込めた歌唱表現を工夫しよう

教材 合唱曲「時の旅人」（混声三部合唱）

深田じゅんこ 作詞、橋本祥路 作曲

〔共通事項〕旋律（フレーズ、主旋律、対旋律）、テクスチャ（音や旋律の重なり方）、強弱（曲にふさわしい強弱）等

#### 2 音楽科の本質と本実践の関わり

本題材では、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉える際に、声部の役割やテクスチャという視点をもたせたいと考えた。声部の役割や音の重なりによって生まれる全体の響きを感じ取る上で、いろいろな音の重なり方を試し、比較する活動を取り入れる。その中で、「対旋律であるソプラノがないとどんな感じがするか」「アルトのずれは本当に必要なのか」など気付きを促すような問いかけを工夫することで、声部の存在意義や演奏効果を実感的に見出していくことができる。またそうすることで「このような役割をもっているから、こんなことを意識して歌いたい」「このパートにはもっとこう歌ってほしい」など、生徒が思いや意図をもって音楽表現を創意工夫することにつながると考え、この実践を行った。

#### 3 実践内容

##### （1）題材設定の趣旨

本題材で扱った教材曲「時の旅人」は、今年度の校内合唱コンクール第2学年の課題曲として提示した。歌詞はやや抽象的ではあるが、過去、現在、未来を歌った曲であり、特に希望にあふれた未来を歌うところに自分たちの姿を重ね合わせることができる。この曲は、大きく4つの部分に分かれており、へ長調ーニ短調ーニ長調ート長調と転調しながら曲調が大きく変化していくことや、ソプラノだけでなく各声部に主旋律が現れるのが特徴的な曲である。曲想を感じ取った表現や、各声部の役割や全体の響きを感じ取った表現を工夫するには教材性の高

い楽曲であると考えた。生徒たちは今まで歌詞や曲想から表現を工夫することは経験してきたが、声部の役割を意識した上で、どのように歌えばよいかということはいまだ意識してこなかった。主役の声部、自分の声部の役割、対旋律の生み出す雰囲気や演奏効果、ユニゾンのよさなどに注目させ、全体の響きを感じ取らせることで、表現の工夫につなげたいと考えた。

## (2) 全体計画 (全7時間)

| 次   | 主な学習内容                                                                                                                           | 配時 |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 第1次 | ○「時の旅人」を聴き、全体のイメージをつかみ、構成について理解する。<br>○正しい音程やリズム、音の長さ、主旋律の声部等に気を付けながらパート練習をしたり、合わせて歌ったりする。                                       | 2  |
| 第2次 | ○それぞれの部分ごとの特徴的な要素を知覚・感受しながら、声部の役割を理解し、パートごとに歌ったり試したりして、各声部の役割について考える。<br>○各声部の歌い方、音色等を工夫し、声部の役割と全体の響きとの関わりを生かした曲にふさわしい音楽表現を追究する。 | 2  |
| 第3次 | ○楽譜を手がかりに歌詞のイメージや情景と作曲者の思いを結びつけ、歌詞の内容や曲想を生かした表現の工夫について話し合う。<br>○表現の工夫について考えたことを基に合唱する。                                           | 3  |

## 4 指導上の工夫

### (1) 学習課題・問いの工夫

第2次では、各声部の役割を考えさせるにあたり、学習課題を「それぞれのパートの存在意義は何だろうか」とした。そもそも、作曲者が意図して3つの声部の動きを楽譜にかいているので、各パートは必要に決まっているのだが、そこをあえて問うことで、各声部の役割や音の重なり注目させることができると考えた。また、話し合いの過程で「対旋律のソプラノがないとどんな感じがするか」「アルトは本当に必要か」等の問いかけを繰り返すことで、声部の役割に気付かせていくようにした。

### (2) 表現活動と言語活動の往還

学習活動の中で、言語活動が題材のねらいや本時の

目標を達成する有効な手立てとなっているか、生徒にとって必要感のある言語活動であるかということなどを考えた。「音楽科の特質に応じた言語活動」は、言葉でのコミュニケーションのみにとどまらず、音によるコミュニケーションを基盤としたものである必要があり、思考・判断した結果や表現の工夫を言葉ばかりで伝え合うことは、本来音を媒体としたコミュニケーションであるべき音楽科の本質を見失っているともいえる。一方で、言葉によるコミュニケーションを適切に位置づけることによって音や音楽によるコミュニケーションを充実させることができる。そこで、話し合いのプロセスとして、表現する(演奏する)→知覚・感受する(聴く)→思考を深め、伝え合う(話し合う)→再び表現して確かめるというサイクルの繰り返しを大切にしたい。表現活動と言語活動の往還を丁寧にすることが音楽科の本質に迫るために重要だと考えた。

### (3) 生徒による生演奏

(2)で述べたサイクルでの活動や、話し合いを行う前後で全体の響きがどう変わったかを比較したりする際に、生徒が自分の声部を歌いながらその変化を客観的に聴くというのは困難である。歌ったものを録音して聴くという手段をとることもあるが、今回は生徒を歌う役と聴く役に分け、生の歌声をその場で鑑賞させた。生徒がどれだけ歌えるかという表現上の問題もあるが、生演奏ならではの響きの豊かさがもたらす効果はとても大きい。また、50分間という限られた時間の中で、繰り返し聴かせたり、ある部分をピックアップしたりするなど、その場の生徒の反応を見ながら効果的に聴かせることができると考えた。

## 5 成果と課題

### ① 焦点化、比較することによる思考の深まり

第1次では、「主旋律」「対旋律」「ハーモニー」という言葉の意味や役割をおさえ、合唱でのテクスチュアという視点をもたせた。その上で第2次では、「各声部の役割を理解し、どのようにして歌えばよいか考え、全体の響きを意識して歌うことができるようにする」という指導目標のもと、楽曲全体の中からねらい

に迫ることのできる部分を2つ取り上げて焦点化した。

①アルトとテノールが主旋律を担い、ソプラノがオブリガート（対旋律）を受け持つ部分（**C**）、②テノールが主旋律、アルトが主旋律の追いかけ、ソプラノがオブリガート（対旋律）を担い、3声がずれるようにして重なっている部分（**H**）である。今まで、主旋律はソプラノが担っていることが多かったのですが、この2つの部分を意図的に取り上げたことはねらいに迫るには効果的であった。また、声部の役割と全体の響きとの関わりを実感するため、それぞれの声部がある場合とない場合で全体の響きがどう変化するかを比較できるようにした。その際、①ある場合、②ない場合、③ある場合と3度比べたことで、自分の考えを再度確かめる機会が生まれ、さらに思考を深めることができた。

＜授業後の生徒の学習記録より＞

- ・いつもは自分のパートのことばかり気になって、他のパートと合わせたときの合唱全体のまとまり方については考えたことがなかったが、今回の授業で各パートそれぞれの役割を考えて、それを知ることができたと思う。ちなみにソプラノがないとまとまらないし、アルトがないとつながらない感じを覚えた。

【テノール】

- ・ソプラノの対旋律の必要性が実はあまり分かっていなかったけれど、ソプラノがあるバージョンとないバージョンを聴くと、ある方が情景とかが伝わってきて、やっぱり必要だと思ったし、だからこそ正しい音程で歌いたいと思った。【ソプラノ】

## ② 問いかけによる思考の深まり

話し合いの中で、教師が「ソプラノの役割は何か」といったような、旋律（主旋律、対旋律、追いかけ）の役割を確認させる問い、「アルトは本当に必要か」といったような、ある方がいいのかわからないのかを実際に検証してみたいと生徒に思わせる問い、下線部のような「対旋律がないとどんな感じがしたか」「対旋律があることでどんな効果があると思うか」といったような知覚・感受したことを言語によって表現するように促す問い等を重ねることで、生徒は自分のパート以外にも意識を向け、思考を深めることができた。また、一人一人の感じ方を全体に広げ共有することで、自分一人では気付かなかったことに気づき、自分の考

えがさらに深まった。

＜活動の流れと話し合いでの問い＞ T：教師 C：生徒

T： ソプラノがあることでどんな感じがしましたか。

C1：アルトとテノールをまとめているというか、包み込んでいるような感じがした。

T： 同じように感じた人いますか？自分の言葉で説明してみてください。

C2：すきまがなくなる。他のパートが伸ばしているときに動いているから。流れるような感じがした。

T： なるほど。（C2の言ったことを拡大楽譜で確認する）じゃあ、ソプラノはどんな風に歌ったらい  
い？テノールの人に聞いてみようか。

C3：ぶちぶち切れないで、全体がつながっているように。でもお経みたいにはならないように。

T： みんな、言いたいこと分かった？一本調子ではダメってことかな。

C3：そうです。歌詞はないけど、盛り上げるところは盛り上がって山になるようにしたらいい。

T： 盛り上がるころってというのは、音が上がっていくところ？（拡大楽譜を指し示す）

C3：はい。

T： じゃあ、ソプラノそんな風に歌ってみようか。

波線部のように「その役割を果たすためにはどのように歌えばよいか」と表現の工夫に関わる問いかけもした。思いや意図を伝え合うことは、生徒の音楽の感じ方や考え方が豊かになり、更なる表現の工夫に結びついていくと言える。一方で、生徒の思いや意図を上手く引き出せなかった場面もある。

T： テノールはここでは主旋律なんですけど、テノール必要ですかね？テノールなかったらどうなると思う？ソプラノとアルトだけで歌ってもらおう。

～ソプラノ・アルト全員で歌い、テノールが聴く～

T： どうでしたか？

C1：俺らいらんないんじゃない？

C2：うん、なくてもよかった。

T： うーん、そうかなあ。アルトは歌ってみてどうだった？

事前には「主旋律のテノールがいないと成り立たないので、他のパートをリードしながら歌わなければならない」という意見が出るだろうと予想していた場面

である。この生徒は、自分たちが歌わなくてもいいと思うほど、ソプラノとアルトの響きを美しいと感じたことが事後のワークシートからも分かった。

男声がいなくてもきれいだった。アルトとソプラノだけだと高い声がよく合っていていいなと思った。男声は低い声だけど、透き通る感じの声で歌いたいと思った。

この反応に「どうしてそう思ったの?」「じゃあテノールの存在意義は何だろう」「その上でどう歌ったらいいかな」と教師がさらに問いかけることで、生徒がワークシートに書いたような、主旋律だからといってただ大きく主張して歌うのではなくふさわしい音色で歌うことや、全体のバランスを考えながら歌うことなど、表現の工夫に関わる思いや意図をその場で引き出し、共有することができただろう。

### ③ 表現の工夫の共有

授業後のワークシートを見ると、役割や全体の響きを感じ取るにとどまり、具体的な工夫の仕方が書かれていないものと、どのようにして歌いたいかという生徒の思いや意図が表れているものとに分かれた。

＜役割や全体の響きを感じ取るにとどまったもの＞

- それぞれのパートに存在意義があり、互いの音を引き立たせたり、立体感を出したりと、とてもおもしろかった。
- 3パートがそろって[H]の部分は完成すると思った。どれか一つでも欠けるときれいな曲にならないと思った。

＜思いや意図（波線部）の表れたもの＞

- ソプラノは大切だなと感じました。私はソプラノなので、頭の上から響かせるような声で、包み込むように歌いたいです。【ソプラノ】
- テノールは[H]の部分の主役なので、もっと大きな声でしっかりと歌わなければならないと思いました。でもソプラノとアルトが聞こえるようにもしなければいけないと思います。【テノール】
- 3パートがそれぞれ違う旋律を歌うことによって、最後のユニゾンで統一感がすごく感じられた。一気にまとまっていてよかった。でもそのためには、各パートがある程度聞こえていないと、大きな統一感にはならないかな。【アルト】

前者は新学習指導要領でいう「知識」の理解にあたる部分であり、後者が「思考力、判断力、表現力等」の部分にあたると考えられる。「どんなふうに歌えばよいか」という後者を引き出す問いかけは、これまでの音楽経験によっても答えやすい生徒とどう答えればよいか難しい生徒に差が出る。そのため、音色や強弱といった〔共通事項〕でおさえたり、楽譜に立ち返って音の高さやリズムのずれを分析したりすることで、共有が図れると思われる。また、まとめとして存在意義の具体的な姿を共通におさえることで、生徒の思いや意図がもっと引き出せたと考えられる。思いや意図を引き出すことが、必要感の伴う技能の習得にもつながる。仲間と共に創意工夫しながら表現する楽しさを味わわせるために、さらなる手立てが必要だと感じた。

（授業者：嶋尾珠子）

### 【参考・引用文献】

- 文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年9月）解説－音楽編－』教育芸術社，2008年
- 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年7月）解説－音楽編－』教育芸術社，2018年
- 副島和久 編著『平成29年版 中学校新学習指導要領の展開 音楽編』明治図書，2017年
- 本校研究紀要 第68号、69号、70号、71号
- 齋藤忠彦「中学校の学習指導と学習評価の工夫改善」『中等教育資料（平成24年7月）』学事出版，2012年
- 臼井学「新学習指導要領における音楽科のポイント」『中等教育資料（平成29年9月）』学事出版，2017年
- 臼井学「生徒にとって意味のある音楽の授業実践に向けて（43）」『中等教育資料（平成30年1月）』学事出版，2018年